



## 「卒業記念コンサート」 青柳いづみこ (ピアニスト・文筆家)

芸大を卒業した年の春休み、フルートと声楽の同級生を誘って豊岡の市民会館で自主コンサートを開いたことがある。

今考えればずいぶん無謀な企てよと思うが、文化ホールは1100席。無名の芸大生が埋めるのはまず不可能なキャパだ。しかも、スケジュールの関係で、コンサートまでの準備期間は1ヶ月ほどしかなかった。

曲目は、それぞれ卒業試験で弾いたり歌ったりした曲目を中心に、フルート奏者はモーツァルトの協奏曲、ソプラノ歌手は歌劇の aria をいくつかと日本歌曲、私は彼女たちの伴奏をするともに、ソロではショパンの『練習曲集 作品25』全曲を用意した。これまた、ピアノのレパトリーの中でも最難曲とされる作品を弾いて、さらに器楽や歌の伴奏をするなどもってのほかなのだが、こわいもの知らずだったのだろう。

マネジメントの事務所もないから、入場料は自分で決める。誰かが、100円以下だと税金がかからないから99円にしては? と提案してくれたので、そのとおりにした。

予算がないからチラシやポスターを印刷させることもできない。一枚一枚手描きでつくり、音楽関係者や学校関係者のもとに陳情にまわった。

労音や合唱関係者が同情して、途中から助けてくれるようになった。

祖母の家がある宿南村の方々も、自転車で個別訪問に協力してくださった。

コンサート前日には他の出演者たちも到着し、3人で近くの城崎温泉に泊まった。寝る前にマッサージさんを頼んだソプラノ歌手から、こう言われた。明日の朝起きたら、私は何をきかれても一切しゃべらなくなっているからびっくりしないでね。

喉をいたわるためらしい。あらためて歌い手は体が資本なんだなあと痛感した。

いくら支援者が増えたといっても、集客には限りがある。本番の客席は1割も埋まっていただろうか。しかし、熱演につく熱演で大いに盛り上がった。私も一生懸命演奏した。

打ち上げのとき、地元のスタッフは口々に、マイクを通さなくてもすみずみまで声の通るソプラノ歌手を賛美していた。とくに「この道は」や「からたちの花」など日本歌曲は親しみやすく、感動を呼んだようだ。

器楽奏者はどうあがいても声楽家には太刀打ちできない。そんな教訓を得たふるさとでの初コンサートだった。



終演後、花束を受け取る筆者=豊岡市民会館

青柳いづみこ ピアニスト・文筆家。CDに『ドビュッシーの時間』『天使のピアノ』（いずれもカメラータ）。著書『翼のはえた指』（白水社）で吉田秀和賞、『青柳瑞穂の生涯』（平凡社ライブラリー）で日本エッセイストクラブ賞。2009年刊の『6本指のゴルトベルク』（岩波書店）にて講談社エッセイ賞。近著に『指先から感じるドビュッシー』（春秋社）。大阪音楽大学教授、青山学院大学講師。日本ショパン協会理事。オフィシャルHP: <http://ondine-i.net>